

未来交換留学生

プロローグ

中度衛星軌道上に待機している本艦は眼下に地球を望める位置に移動していた。

予定通りのレーザー信号の交信が相手と終了したのを確認し、再びチェックを始める。

「現時点での進捗状況はどうか、カピタン」「はい艦長、ストレスフィールドの安定化は順調、作業に大幅な遅れは出ていません」マルチビューパネルに映る彼は機関室から答える。「了解したカピタン。予定通り、20分後に動作テストを行う」

今日だけで六度目のストレスチェックを行い、これから今日の最終テストを行う。

通常通りの航行であれば、ここまで大規模なチェックを行う必要はないのだが、今回ばかりは例外なのであろう、安全管理部門から出された条件は歴史上初めてジャンプが行われた時とほぼ同

量のチェックであった。

「歴史に残る行動とは言え、この量は少しばかり骨だな……各員に告ぐ、これより最終チェックを行う。今回で異常を確認できなければ、本艦は予定通り目的に向けてジャンプを行う。メインドライブ接続、目標20分前にセット」

第一章

少なくともその日はよく晴れており、国営放送の天気予報は一週間の間晴れを予報し、家族サービスをするなら今だと急き立てる。

うんざりしながらいつもと同じメニューの朝食を済ませ、出勤の準備を終わらせる。

今日は早く帰るよ はいどうも じゃあ行ってきます。

定型通りのやり取りを終わらせ、私は研究所への道を急ぐ。駅の新聞スタンドでいつもの雑誌を買い、いつもの駅で乗り換え、研究所に到着

する。

自分の執務室で雑誌を読んでいると、会議を知らせるベルが鳴り、同僚のカネモト博士が息を切らせて入ってきた。

「もう会議は始まるのに、君はまだそんな雑誌を読んでいるのかね」「ああ、カネモト、今月のは傑作だね。なんでもタイムトラベラーは相当前から存在しているっていう内容で……まったく、これが本当なら私達がやっている研究はどうに終わっているみたいだよ」

呆れた顔でこつちを見るカネモトを尻目に準備してあった資料を持ち、二人揃って会議室に向かうことにする。

会議室の窓から中の様子を見てみると、若い10人程の学者がモニターに表示された図式を前に、なにやら熱心に会議をしている。

「カネモト、どうやら我々は遅刻したらしい。まったくもって遺憾だが、もう仕事は残ってないんじゃないか」

経済学部
経済学科3年

美久月 泰士

私の茶々にも応じず、彼は会議室に何事もなかったかの様に入室し、データをモニターに表示する準備を着々と済ませていく。

「失礼しましたセンセイ、すぐにデータを保存しますので」「ああ、良いんだ。自由に考える事は自分の能力を向上させる、素晴らしいことだと思うね」

自分の資料をカネモトに渡し、立ち上がった若い学者を制止する。

「イシムラ博士、もう始めてもいいかね、日が暮れるまで待ってもいいが」

「この様に、一定の物質が放つ原子よりも小さい、カケラともいえるこの物質が高速度で衝突することにより、非常に小さな空間的乱れを確認することができ、これをブラックホールとして活用することができる可能性がある訳であります」

「しかし、イシムラ博士。現在の技術で観測できないその空間的乱れとやらを代用することなど不可能なんじゃないかね。少なくとも、今後そのレベルの現象を観測するには、第二班が研究中の分子探査型スコープを実用化する必要がある」

眼鏡の淵を持ち上げ、反論に一息入れるカネモトに私はお手上げ状態で心の中で溜息を吐く。

「その事に関しては反論の余地はないよカネモト

博士。

しかし、発展させる事で今後タイムワープをも可能にするであろう理論ではあるよこれは」

「君がタイムワープに熱心なのは結構だが、少しは科学的な話をしてもらいたいね博士」

この日の会議はこの言葉で幕を閉じた。

この日は他に運輸関連での理論の手直しと、簡単な資料整理だけで一日が終わった。

家に帰り、食事の後にテレビを見てみると、息子がPCを片手にやってきた。

「ほら昨日から言ってたアレだけど、まとめて来たよ。雑な編集だけだね」

「テレビに同じ人間が映ってるって話か。それはお前、テレビリポーターの話をしてるんじゃないか?」「まあいいから」

映像再生機能を起動しながら言う息子にアルコールの入った頭で応え、実際に映像を見ているが、鈍い銀色のサングラスを掛けた男が見切れるように映りこんでいるニュース映像を繋ぎ合えたものだった。

「まあ、そうだな……よくある話だが、映画のプロモーションか、それともドラマか、まあ宣伝の一つだろう。宇宙戦争の話は知ってるか? 知らない? ラジオのニュース番組に宣伝を混ぜて

放送したら大騒ぎになったって話さ。その手の話題を狙った宣伝だと思っよ」「わかったよ父さん。でも、このニュース映像だって一番古いのは二年前だから、映画にしては妙じゃない?」「なら、物好きが同じ格好でテレビに出たがったんだろう」「もういいよ父さん」リビングから出ていく息子に声を掛ける。「編集は見事だったよ」

次の日の朝、なにやらニュースでは政治家の汚職問題をやっていたが、それ以降まったく話題にも挙がらなくなるほどの大事件が起きた。

各種マスコミが集まり、大きな広場を持つシンポジウム会場に入る政治家の姿を撮影しようと詰めかける中、立ち入り禁止として整理されていた広場の中に、突如として人工物と思われる流線型の物体が電流か何かを帯びながら出現したのである。

会場は蜂の巣をつついた様な大騒ぎ、マスコミは政治家そっちのけでカメラを向け、突然の事に浮足立っていた警備員はマスコミが規制線を越えようとする事で冷静さを取り戻し、素早く物体を包囲し、一部はより強固にマスコミを抑えた。

全国が固唾を飲んで見守る中、物体の後部と思われる箇所が開き、中から白色の防護スーツに似

た装備とヘルメットを被った人が降りてきた。

「私達は今より500年後の地球からやってきました。この邂逅が今後より大きな発展を実現する事を願います」

いまだ半信半疑ながら、ここに人類初のタイムトラベラーとの遭遇が行われたのである。

第二章

この大事件が起きてから、世間は蜂の巣をつついた様な大きな騒ぎになった。

世界各国でも小さな時間の差異はあれど、同様に未来人と名乗る人間が既存技術では製造不可能と断定される流線型の物体から降り、人類の発展を祈る発言をしているのである。

急遽として政府首脳レベルでの極秘の会談が予定されたが、ある一国が独自に未来人との外交ルートを確保し、続々と会談の前に未来人とのコンタクトが始まり、政府首脳レベルでの会談は未来人代表を交えたものとなった。

「私達は来たるべき未来において、皆様周知の通り、タイムトラベルの技術を開発致しました。

私達は現在の地球の未来を大変危惧しています。

現在、私達の人口はある大災厄の影響を受け、

年々減少の一途を辿っています。この現状を打破する必要があるからこそ、私達の技術の一部を提供し、私達はこの時代の技術の提供を受けたいと考えております」

「失礼ながら、少々質問が。」

その大災厄とやらが起こる正確な年代は教えていただけないんですか。それと、どうして現代の技術を知る必要があるんです。少なくとも我々現代人は500年前の時代に何が起こったかは歴史として知っていますし、古い技術を通過する事で新たな技術を身に着けていると確信していますが、それに何か相違がありますか。」

「反論の声を上げた議長国代表に対し未来人は語る。」

「お答えしましょう。第一の質問ですが、大災厄の日は限りなく変動的であり、正確な日時を知る事は不可能です。なぜなら、無数の選択が行われる事で出来事は決定されているのであり、発生する結果は同じでもそこに至るまでのプロセスは必ず同一のものであるとは限らないからです。

第二の質問に関しても同様ですが、自然選択説の話は技術にも適用される事であり、私達は既存の技術体系では至る事の出来なかつた技術に到達する為に破棄された技術の見直しを行う必要があるからです」

「話を続けましょう。私達の技術を習得した優

秀な人間300人と、そちらの技術を習得した優秀な人間300人とで交換留学を行うのはどうでしょうか。互いに互いの技術、情報をより密接に知ることができる最善手だと思いませんか」

「300人とは随分少ないな」

「残念ですが、技術的問題、政治的問題の双方から受け入れる人数は300人が上限になり、また私達が運用可能なエネルギーの残量からも期間は六か月に限定させていただく事になります」

「六か月か」「なんて短さだ」「もうちょっと議論する必要がある」

にわかにざわめき始める議場だったが、形式的に議長を務める事になった国がまとめることが出来た。

「つまり、我々は六か月の間、世界各国から一人ずつ優秀な人間を集め六か月間の交換留学に送る事で互いの要求は満たせる訳でありますな。日程などは……」

「ご心配なく議長殿。私達の技術を活用すればなんとかなります。そちらは完了次第通常電波通信をこちらの受信機宛に送ってくださいれば結構です。みなさんの前に着陸した場所と同じ場所、留学生の交換を行いましょ」

交換留学の手配が済んでからは非常に早いス

ビードで実行に移されていった。

最初のうちこそ文化の違い（未来人たちにとっては生の空気や、通常の方法で栽培された野菜や、肉製品なども珍しいらしく、大騒ぎだった）を感じたが、今では当初の目的通りに技術的やりとりが活発に行われるようになった。

未来人の出現に、幸運にも交換留学生の長期的受け入れを請け負う事が出来た私の研究所は以前に比べて九割増しで活気を帯びていた。

「ええ、イシムラ博士。その理論を使うことで私達がこの時代に来るのに使ったタイムワープ理論は説明する事ができます。原子よりも小さい物質同士が衝突する事で発生する空間的乱れに対し外圧を加えることで、空間的乱れを増大することができ、極小ブラックホールの生成に至ります。この極小ブラックホールをひたすら平坦に引き延ばし続ける事で次第に次元的乱れを発生させる事となり、高速度での移動・・・最終的にはタイムワープを行うことが出来ます。すでにスタート地点に立っている理論ですね」

「驚いたな。聞いたかカネモト博士、これが正しいなら我々は500年後にはワープ航法どころかタイムワープ航法をも実用化できるそうだよ。いやはや素晴らしい……」

感嘆のうなりを挙げて次の質問をする私に未来人のグロールは快く答えてくれる。

互いにとって非常に効果を上げる事のできる留学になる事は間違いなかった。

第三章

いよいよこの交換留学も大詰めになってきた五か月目に入り、より忙しさを増してくるだろうと思われたが、珍しくグロールは規定の時間になっても研究所に姿を現さなかった。

風邪か何かだろうと思われていたが、さすがに連絡がない事に疑念を持ち、滞在先のホテルに連絡を行ったが、まったく連絡が取れなくなった。

なにか重大な問題が起きたのだと、滞在先のホテルに直接行く事となったが、そこに居たのはグロールが今まで見たことのない症状で病死している現場だった。即座にホテルは閉鎖。

あらゆる分野の医師達が集まり、いろいろな検査を実施したが、詳しいことは分からず現代人の間ではまったく流行ったことのない新種の病気であるとされた。

そして時間差があるものの、全世界でも同様に病死した未来人が発見されはじめ、気付けば派遣されていた交換留学生は全員病死、留学終了の期

限はすぐ目前に迫っていた。

留学生受入れ国は各国首脳と、軍人、さらにタイムワープ理論を専攻する科学者（私も含まれている）を集め、この事態に緊急の会議を持つ事になった。

「諸君非常にマズイ事となっているのは周知の通りだと思う。留学生一・二名の事故による死亡などは考慮されていたが、全員の死亡による信頼関係のダメージは計り知れないものになる。そこで考えたのが、ここは留学生の替え玉を用意する事で……」

「もともとの一号患者は君の国で出たんじゃないかね。そもそも替え玉という発想が一番に出てくるのがおかしい。本当は君の国で既に替え玉と入れ替わっていて、先進技術を独占しようとしているんじゃないか」「ありえる話だ」「そうだそうだ」

各国の利権が複雑に絡み、まったくとして会議が進まない中、議長国に対しさらなる追及が始まる。

「我々が派遣した留学生からの定期連絡が途絶えている事に関して、閣下はどうお考えですか。事前の決定では一月に一度の定期連絡が行われる事になっていましたが、

その連絡が行われなくなつて二か月が経過しよ

うとしている。

「対外上は各国共同の留学生派遣になってますが、実質閣下の国が首頭をとる形になっているでしょう。我々は定時連絡で得る事の出来る情報を閣下が独占し、より権益を拡大しようとしているのを懸念しているのですよ。連絡に関してはどうお考えで」「失礼ですが、その事に関しては私が答えましょう。定期連絡の件に関しては私が、我々も連絡を受けていない事は事実です。それに、我々も留学生を派遣している事をお忘れなく。

我々は今回の事件が未来人側が巧妙に仕組んだ侵略への布石であると考えています」新興国の激しい追及に対して議長国側の軍人が立ち上がり、さらに言葉を続ける。

「仮に未来人が侵略を行うのであれば、我々は既に対抗する手段を用意しています。技術提供を受け大きく開発が進んだ分子探査型スコープを使う事によって、未来人がこちらにタイムワープする際に発せられる空間の乱れを検出し、即座に座標を表示する事が出来ます。彼らが空間的乱れを発生させれば、我々はそこに核弾頭を速やかに撃ち込み、空間的乱れを増大させ、逆にこちらから相手の時代にタイムワープする事が可能です。一度橋頭堡を作ってしまったら、侵略を打ち砕く事は可能であります」

「彼らに侵略の意思があるのかどうか、それはまだ分かっていないだろう。問題は彼らにどう説明するのか、そして未来人が感染した病気は我々にも感染するのかどうかだ。それに、現代を攻撃したとして未来人側は自分の祖先を攻撃しているのと同じ事だろう。そんな天に唾を吐くようなまねをなぜする」「お言葉ですが、タイムパラ

ドックスの理論は完全に証明されていません。これから未来人がすべての情報を開示したとは思えませんし、彼ら側との接点が消えるだけで、未来にはまったく影響がないものかもしれません」

「諸君、我々はこの対未来人用の組織を作る事を提言する。諸君らの参加が決定し次第、留学最終日の受け渡し日に事実の追及と、如何次第では直ちに攻撃に移れるように軍備を整えておく事を目的とする。しかし、もしもの場合に備え、医学者にはそのまま感染者達の調査に当たらせ、奇病の原因解明に全力を注ぐものとする。参加の国は」

議長国のこの発言に、各国が互いに顔を見合わせたあと、自分の利益と現代人の存続のために続々と手が上がり始め、最終的には全会一致で可決された。これを期に対未来人との全面戦争へのカウントが始まろうとしていた。

第四章

会談の後数週間が経過し、私はカネモト博士と研究所で会談について話していた。

「イシムラ博士、私は未来人に攻撃の意思はないと見るね。攻撃するとしたら、なぜタイムワープを検知可能な分子探査型スコープが正しいという情報を与えたのか。本気で侵略する気なら分子探査型スコープの理論は全面的に失敗であるという筈だと思うね。我々は大きな間違いをおかしているに違いない。君は彼らが留学した現代人の定期連絡がなくなった理由に関してどう考える。もしかすると、環境の違いからくる未知のアレルギー反応か何かで全員倒れて、あわてた未来人が誤魔化しているのかもしれない」

「アレルギー……そうか、これはアレルギーだよ。君も医学者に知り合いの一人か二人はいるだろう。すぐに連絡を取るんだ。彼らは食品すべてに自然ものと言っていた。彼らは人工栽培、人造生成された物しか食べてなかった、だから自然食の多くの要素が取り込まれている状態に体が耐えることが出来なくなつたんだ。これが本当なら未来と現代とで戦争をするなどという不幸な事は回避できる。留学最終日の引き渡しは……」

唐突にしゃべり始めた私をカネモトは怪訝そうな顔で見、カレンダーを指差した。

「引き渡しは明日の十二時だ」「君もテレビで見ただろう。既に第一戦備体制が敷かれ、タイムワープ予想ポイントは立ち入り禁止だ。医学者たちは原因究明を投げたよ」

「いいから連絡を取るんだ。このままでは人類が死滅する事になるんだぞ」

私の剣幕に押され、渋々と電話を手取るカネモトだったが、私は一つの確信を持っていた。このたった一つの気付きで世界が大きく変わろうとしている事を。

そして当日 予定タイムワープ地点に予定通りに現れた彼らは現代人と同じく、重装備と多数の護衛を引き連れて降りてきたのであった。

「残念な事ですが、私達はあなた方の国から送られてきた留学生が細菌兵器のキャリアーとして運ばれてきたと断定しました。かれらは私達にはわからない未知の病気で全員が死亡してしまっただけです」

「君たち未来人がそう思っていることは非常に遺憾だ。我々は君たち未来人が現代を侵略するために、この留学を計画し送り込んできたものだとしている。速やかにこれが事実ではないと確認

できなかった場合、我々はしかるべき手段によって対抗に出る」

重苦しい空気の中、互いに譲らぬ主張が繰り返される中、場違いにも一本の電話が鳴った。速やかに側近がその電話を受け取り、二三話すその内容を耳打ちした。

「今入った情報だが、君たち未来人は現代の環境下において特殊なアレルギーを引き起こす事がわかった。そちらで確認は」

未来人が片手をあげ、装置をいくつか操作してしばらく待つと、彼らは一つのデータを示した。

「私達の最新のデータです。私達は生活環境を自然環境ではなく、人工の環境ドームで生活しています。私達にはまったく異常を示すことのないフィルターの残留物があなた方に激しいアレルギー反応が出る事を今確認しました」

「つまり……きわめて不幸な事故だと」

「そういうことです」

互いに顔を見合わせ、ゆっくりと握手を交わした。ここに時代間戦争は回避され、予定ポイントに照準を合わせていた核弾頭は再び通常通りの待機状態に戻った。

のちに判明した事であるが、大災厄と呼ばれた

のはこの時に発射された核弾頭によって引き起こされるものであり、自然発生したものではないということだ。

我々は不幸な事故一つでたやすく天秤が動いてしまうことを再認識し、多くを失う事がなかったことに感謝した。その後、タイムワープが過去に対して大きな事故を起こす危険性が指摘された事から、以後タイムトラベラーが現れる事はなかったが、人類は未来で得られるであろう英知を少しでも感じる事のできた瞬間であった。

コメント

今回字数制限の中で、タイムトラベルを扱ったハードSF風の文章に挑戦してみました。かなり駆け足のテンポになってしまいましたが、この未来と現代についての緊張状態、危うさで、冷戦状態の危うさを表現してみたかったです。

結果的にSF要素も緊張状態も制限からかキチンと書ききることができませんでした。結果として今までにない作品にできたと思います。

以上で終わります。